毎日新聞
毎日自動車整備新聞
発行／
社団法人 東京都自動車整備振興会
〒151−0071
東京都渋谷区本町4-16-4
電話　03-5365-2311
毎日新聞東京センター
〒100−0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1
電話　03-3212-5180

目　次

巻頭インタビュー
女優　菊川怜さん　1
任せて安心、認証工場　2
エコ整備で未来を守る　2
オアシス工場へ行こう!　2
あなたにできる日常点検　3
点検整備を怠ると…　3
灯火類、大丈夫ですか?　4
走行中、地震に遭ったら　4
GOODマーク、安心と安全の証です　4

知的に幅広く活躍 がむしゃらな20代越え 女優人生真っ盛り!

テレビに、映画に、舞台にと明るく知的な笑顔を振りまき、幅広い人気を得ている菊川怜さん。東京大学工学部建築学科3年のときに東レ水着キャンペーンガールに選ばれ、翌年女優デビューしてから12年。飾らぬ素顔に演技の年輪も加わり、仕事も人生もただいま素敵な30代の真っ盛り。9月3～26日、東京・明治座公演「女は遊べ物語」のヒロインとして出演中の菊川さんを楽屋に訪ねた。

ヘアメイク／大森裕行（VANITES）
スタイリスト／三塚亜以子
衣装協力／ブラウス：PINKO、ピアス：テンサウザンドシングス伊勢丹新宿店

◎INTERVIEW◎　◎REI KIKUKAWA◎

菊川怜（きくかわれい）さん

――「女は遊べ物語」は司馬遼太郎さんの小説「一夜官女」が原作だそうですね。

菊川　ええ、でも短編小説なので、そのままドラマにしたら30分くらいで終わってしまう物語。それを脚本の齋藤雅文さんが面白くふくらませて、楽しいお芝居にしてくれました。

――戦国時代を舞台にしたお芝居で、織田信長の家臣・七蔵の女房、小梅という役だとか。どんな女性ですか。

菊川　とてもかわいい悪女です。旦那さんの伊藤七蔵政国は心優しい愛妻家で働き者。戦場で必死に手柄を立てて、たくさんご褒美をもらって我が家に帰ってくるのですが、女房の小梅が着物は買う何は買うと、とにかく次から次へと散財してしまう。揚句の果てには借金までしてしまうので、旦那さんがいくら働いて儲けてきても足りません。主人・七蔵は文句を言いながらも、小梅を愛しているので、また戦場に行って縦横の活躍をして、その功績が認められて、また褒美をたくさんもらって帰ってくる、だんだん出世の階段も駆け上がって行く。女房の浪費癖が結果的に夫の出世を後押しする、あるいは夫を奮起させるためにわざと妻が散財するというアイロニー漂う戦国コメディですね。

――その涙ぐましい旦那さん、七蔵役を中村梅雀さんがなさっています。もうすでに何回か共演されていますよね。

菊川　はい。実は夫婦役は今回が2度目なんです。初めてご一緒したのは2時間ドラマ「扉の中の戻らない女たち（1）～宇都宮女子刑務所2006」（日本テレビ）で、会社が倒産して困っている夫（梅雀さん）を助けようと、16歳下の妻の私が会社の金を詐欺・横領して服役するというドラマでした。次は今年1～3月の連続ドラマ「赤かぶ検事京都編」（TBS）で、このときは親子役でした。検事の父と法廷で対決する弁護士の娘という関係でした。そして今度は再び夫婦役に戻りました。

――そうすると、もう息はぴったりですか。

菊川　ええ、ぴったりです。「いつもの、そのままの怜ちゃんでいいから」とおっしゃっていただいていますので、甘えるところは甘えさせていただいています。お芝居の大先輩ですし、すごく尊敬する役者さんです。よく食事にも連れていっていただきます。もちろん、奥様とご一緒ですが。

この芝居は時代劇ですが、セリフ回しも時代劇ぽくなくて、演出の西川信廣さんからも「時代劇HK」も印象に残っていれずに、普段のあなたでいい」といわれました。

それに、芝居でこういう飛び跳ねるような、はっちゃけた女性を演じるのは初めてなので、ワクワク楽しみながらやっています。

――お芝居といえば、「ここ明治座が初舞台でしたね。05年公演「五瓣の椿」のヒロインおしの役、山本周五郎原作のやはり時代劇。

菊川　初舞台で1カ月公園の初座長。毎日一生懸命、必死でやりました。重圧がドドーンと全身にかかって、体力的にも精神的にも大変でした。第一、着物が重たくて、正座するので膝が痛くて痛くて。冷やしても痛みが取れずに、最後まで我慢、我慢でした。いい経験になりました。他の役者さんと一緒に芝居しながら、目に見えないけど何かが自分の実になったなあと後から気がつきますね。

――女優デビュー以来、もう10年以上たちましたが、ご自分の成長は実感されますか。

菊川　いえいえ、毎回ドキドキでやってきたというのが実感です。よくできた演技なんてありませんよ。ああ、そういえば、「私の青空2002」（NHK）で、青森のリンゴ農家の女性をやったときはよくいろいろな方から誉められました。作家、林真理子さんの原作をドラマにした03年連続ドラマ「夢みる葡萄～本を読む女～」（NHK）も印象に残っています。やはり演出家との出会いが大切だなと思います。

それにしても20代はとにかく敷かれたレールの上をがむしゃらに突っ走ってきたなあという印象ですね。うまいとか下手とかなんてわからずに、一つ一つの仕事を必死でやってきた。でもそういう時期があったからこそ今があるんだと思うと、初期の自分にも「ありがとう」と言いたいですね。

30歳代に入ってから少し考えが変わりました。得意不得意は誰にもあると思いますが、苦手な役が来ても、それをくださった方は、その役が私に向いていると判断されたわけで、それを自分で勝手に評価することはいい、いただいた仕事が自分に合った仕事なんだ、女優冥利だと思うようになりました。

――ドラマだけでなく、情報番組キャスターや対談、歌番組の司会、海外紀行のナビゲーターなど幅広い番組を経験してきましたね。

菊川　とくに「真相報道バンキシャ！」（日本テレビ）は02～09年までキャスターを担当させていただき、毎週ナマ番組なので当時はいっぱいいっぱいでしたが、それがいろいろな仕事に繋がりました。自分の視野も広がったし、お芝居の演技にも繋がった。仕事の面白さがわかりかけてきました。今後またニュース番組に関わらせていただけるならばぜひやりたいです。

――クイズ番組「全国高等学校クイズ選手権」（日本テレビ）のメイン・パーソナリティも昨年やっていましたね。

菊川　今年の第30回（9月3日放送）も2年連続で務めます。いやあ、知識のレベルの高さと負けず嫌いの激しさにびっくり。こんなに一生懸命、クイズに青春に情熱をかける高校生がいるのかと驚きました。私の高校生時代なんて、アッパラパーで本当に純粋に無邪気でしたよ。ダジャレをかまして仲間を盛り上げるのが得意でした。当時はまさか女優になるなんて夢にも思いませんでした。

――ドラマでは、どんなものをやりたいですか。

菊川　私がやってきたものの中に、「OL銭道」（テレビ朝日）、「霊感バスガイド事件簿」（テレビ朝日）などのコメディがありますが、もともとコメディがやりたかったというか、好きでした。見るのも、「アグリー・ベティ」、「アリー my Love」といったラブ・コメディをよく見ていました。それにホームドラマもやりたい。家族ものは演じていて落ち着くし、撮影現場に行くのも毎日楽しいですからね。もうすでに20代で3回も母親役をやっています。

――ところで、菊川さんは颯爽とクルマを運転するイメージがありますが、ドライブには出かけますか。

菊川　大学に入った年の夏に運転免許証を取りました。そのときは一人暮らしで、マイカーに乗ってコンビニに買い物に行く、実家に戻って墓参りに行くといった程度で、仕事をするようになってからは運転しなくなりました。メンテナンスはプロに任せています。安心なクルマで、気分転換に時々ドライブを楽しめたらいいですね。

プロフィール

1978年2月28日、埼玉県生まれ。99年ドラマ「危険な関係」で女優デビュー以来、「着信アリ」、「松本清張スペシャル」3本、「林家三平ものがたり」、「病院のチカラ～星空ホスピタル～」、「打撃天使ルリ」など数多くのドラマに主演。「出雲阿国」、大河ドラマ「新選組!」、新春ワイド時代劇「国盗り物語」「柳生武芸帳」など時代劇も多い。映画も「ゴジラ FINAL WARS」、「蒼き狼 地果て海尽きるまで」、今年公開の主演作「めおん 『恋愛離婚』」など。国連難民高等弁務官スペシャルサポーターを04年から務めている。